第８章　岡山南遺跡（ＯＭ2015-1）調査のまとめ

第１節　調査のまとめ

岡山南遺跡の今回の調査では、１地区で周辺では皆無であった古墳時代前期の遺構を確認した。また２・３地区では古墳時代後期に属する遺構を確認した。さらに、２地区の河川最下層からは縄文時代の遺物が出土した。以下、それぞれ検出した遺構の時期ごとにまとめを行いたい。

縄文時代　縄文時代の遺物は、２地区で検出した河川 11 の最下層である第 14 層から出土した。遺物は小片ばかりで風化しており、図化できたものは１点のみであるが、６次調査で大溝の最下層から出土したのと出土状況や遺物の時期ともに同様である（野島 1982）。この河川 11 最下層は遺物が示す縄文時代晩期に堆積したと考えられ、周辺に縄文時代晩期の集落が存在した可能性は十分に考えられる。今後のこの地域での発掘調査で、この時期の集落が発見できることを期待したい。

古墳時代前期　古墳時代前期の遺構は、１地区で２本の溝を検出した。溝１からは多くの土器が完形に近い状態でまとまって出土し、これらの土器はおおよそ布留２式の時期でまとまっていて、一括資料であるとみる。この土器群の性格は、祭祀利用され溝に遺棄されたものと現時点ではみておきたい。出土した中に１点タタキ調整された甕が含まれていた。図面上では１点のみ北側にやや離れて検出しているが、この甕のすぐ南は調査時に下層確認トレンチを設定し掘削し、その後遺構掘削時にも最初にトレンチを設定し掘りはじめた地点で、多くの土器を取り上げてしまっており、土器群はこの空白部分にも存在していた。この甕も同じ土器群に属するのは確かである。布留２式期にはタタキ調整された甕は残らないとされることが多いが、この資料はその点で注意を要する資料と言えるだろう。

溝１と２の合流部では溝１の土器群よりやや新しい土器が出土している。溝１と２は、合流部の断面観察では徐々に埋没しながら同時併存していて切り合い関係はないことを確認している。合流部で出土した土器は、溝１の土器群埋没後浅くなった溝１で使用され、相対的に深い溝２へと流れ出て出土地点に遺存したものと考えたい。なお、１地区北側部分の台地状の高まりで溝１以外に古墳時代前期の遺構を全く検出せず中世の遺構のみであったので、中世段階で台地上が削平されている可能性を考えたい。

古墳時代後期　古墳時代後期の遺構は、２・３地区で溝と河川を検出した。当初は同一遺構とみていたが、遺構の方向や埋土の違い等からみると、異なる遺構のようである。３地区の溝は細片の遺物が少量出土しただけで、遺構の性格等は不明であった。２地区の河川では TK10 型式古段階の完形の須恵器坏身とともに子持勾玉が出土した。四條畷市内では中野遺跡で出土していて（村上 2000）、２点目の出土であった。それら２点の遺物は、河川において水に関連する祭祀等に使用されたものであろう。

このように、この調査では複数の時期の遺構を検出し、これまでに不明確であった遺跡北西部の様相について知見を得ることができた。岡山南遺跡は、これまで主に古墳時代中期～後期の成果がクローズアップされ、埴輪が出土する集落遺跡として認知されている。今回の調査でもその時期の遺構を検出し、新たな知見を加えることができた。

さらに、これまで周辺では検出されることがなかった古墳時代前期の遺構を検出することができた。遺跡付近には、今回の調査地から北西に 500ｍの位置に、古墳時代前期中頃の前方後円墳である忍岡古墳が存在する。忍岡古墳の被葬者の勢力基盤として対応する集落としては、これまで古墳から西に１㎞の距離にある讃良郡条里遺跡の集落（後川・實盛・井上編 2015）等が想定されていたが、今回の調査で古墳からさらに近い距離にある集落の存在を想定することが可能になった。岡山南遺跡で今回検出した遺構も、讃良郡条里遺跡の集落と同様、忍岡古墳の被葬者の勢力基盤の一つとなった集落に属するとみてよいであろう。古墳時代前期におけるこの地域の様相は、忍岡古墳が存在すること以外これまで不明な点が多かったが、讃良郡条里遺跡の調査も含め、古墳とその勢力基盤となる集落の存在が徐々に明らかになってきたと言えるだろう。今後も、この点については調査を継続し、忍岡古墳の被葬者の勢力圏等も含め検討していきたい。

（實盛）

第２節　讃良地域の古墳時代前期

１．はじめに

岡山南遺跡の調査では、布留２式期の良好な一括資料を含む古墳時代前期の遺跡を調査することができた。岡山南遺跡が属する讃良地域（寝屋川市南部・四條畷市・大東市北部）においては、これまで忍岡古墳の存在は知られていても、近年まで古墳時代前期のまとまった集落が知られておらず、第二京阪道路建設に伴う調査等でようやくその存在が明らかになってきた経緯がある。ここではそれらの遺跡も概観しながら、岡山南遺跡を含むこの地域の古墳時代前期について歴史的状況を整理し、岡山南遺跡の位置付けについても検討したい。

これまでに讃良地域の古墳時代前期については、忍岡古墳の存在についてのみから語られることが多かった。それは、忍岡古墳以外にこの地域で古墳時代前期の古墳や集落遺跡などがほとんど知られていなかったためである。その状況に変化が生まれてきたのは第二京阪道路の発掘に伴い、庄内式期から布留式期にかけての集落域や墓域の調査が進んできてからである。

おもに墳墓の面から検討したものとしては、西田敏秀による北河内地域全体の検討や（西田 2009）、野島稔による讃良地域中・南部の古墳時代全体を通じての検討（野島 2009）などがあげられる。

おもに集落という視点から検討したものとしては、濱田延充による一連の検討や（濱田 2004、2009）、市村慎太郎による竪穴建物に重点を置いた検討（市村 2009）などがある。

首長墓と集落の関係という視点では、井上智博が第二京阪道路の調査段階から小路遺跡の前方後方形周溝墓と周辺集落との関係について注意した（井上 2004）。その後福永伸哉や（福永 2008）、田中元浩（田中 2009）がその点について検討を行い、米田敏幸は土器編年と古墳の対応の検討を行っている（米田 2013）。

また全体の概観として一瀬和夫はこの地域も含め地域・時期とも全体を通してみた遺跡の概観を行っている（一瀬 2005）。

首長墓と集落の関係性は、上記にあげたような検討で、小路遺跡の前方後方形周溝墓については盛んに言及がみられるが、忍岡古墳についてはあまり活発とはいえない。本節では、忍岡古墳と周辺集落の関係性についても検討し、そのなかで今回発掘調査した岡山南遺跡の成果を位置づけるとともに、讃良地域の古墳時代前期における動態について整理することとしたい。

２．讃良地域古墳時代前期の首長墓（１）小路遺跡前方後方形周溝墓

讃良地域の首長墓として、まず出現するのは寝屋川市の小路遺跡で検出された前方後方形周溝墓と言ってよいであろう（木下編 2004、六辻編 2006）。小路遺跡では、一辺数mから 10m前後の方形周溝墓群がみつかったが、その墓群の中に１基、全長 22.7mと卓越した規模の前方後方形周溝墓が含まれていた。この周溝墓は後方部が長さ 12.2m、幅 10.2mで、前方部は長さ 10.5m、前方部端の幅７m、くびれ部の幅 3.4mであった。周溝墓の上部は削平されていて主体部はみつからなかったが、周溝内で土器がみつかっており、出土した土器から庄内式～布留式期初頭の周溝墓とみられている。

この周溝墓の周囲ではほぼ同時期の方形周溝墓群も検出されていて（木下編 2004、黒須編 2004）、墓域の中の一基の墳墓が卓越した規模となっている状況を読み取ることができる。

他の方形周溝墓群と同一墓域に築かれているという点では、のちの典型的な前期古墳とは異なる様相であるが、卓越した規模をもっている点、墓域にある他の周溝墓と異なる墳形である点から、やはり首長墓として取り扱ってよいであろう。

３．讃良地域古墳時代前期の首長墓（２）忍岡古墳

小路遺跡の前方後方形周溝墓の後に北河内南部随一の規模で造られたのが、全長約 87mの前方後円墳である忍岡古墳である。古墳は東側からのびる丘陵尾根の西端に位置していて、現在墳丘上には式内社である忍陵神社が鎮座している。古墳からの眺望は非常によく、古墳時代には眼下に河内湖と湖岸にあったであろう集落の様子をみることができたことであろう。この古墳は、昭和 10 年（1935 年）の京都大学による調査で発見された（梅原 1937）。古墳の墳丘は当時から既に改変されていたが、当

時残存していた墳丘から、古墳は一段低い基壇のような部分を持つ二段築成の前方後円墳で、主軸を南北方向に向けた後円部径約 45.5m、高さ約６m、全長約 87.9mの前方後円墳と想定された。墳形については、四條畷市教育委員会で行った調査で、前方部の裾がバチ形に開く可能性が想定されている（野島 2006）。葺石は存在しなかったようだが、円筒埴輪は後円部の上を中心に立てられていたようである。

主体部は後円部のほぼ中央に位置し、古墳の主軸とほぼ平行する南北方向のもので、安山岩質の板石材を積み重ねた長さ約６m、幅約１m、高さ約１mの竪穴式石槨（石室）である。底部には 2〜30cm ほどの厚さで粘土を敷き、その上に、一本の木を縦に二つに割り中を刳り抜いた割竹形木棺が設置されていたとみられる。想定される棺の大きさは長さ約 5.7m、幅約 0.75mであった。埋葬施設の床面は北側がやや高く傾斜していて、頭が北側で埋葬されていた可能性がある。

この石槨はすでに盗掘されていて、北半分のほとんどが破壊されていた。粘土床の下部はすぐに古墳の盛土となっていたが、石槨の壁部分の下には厚い砂利敷きの地固めがしてあり、東側ではそれが厚さ 60cm 以上あった。さらに、北側ではそれが粘土の縁から 90cm を超える厚さがあり、加えて下部は粘土の設置面より 20cm ほど深く掘られ、その基底にやや大きな割石を並べ、その上に砂利を重ね置いた構造であった。これはその上に築かれる側壁を支えるための基であるとともに、排水施設が設けられていたものとみられる。このような構造は四條畷市教育委員会で行った再調査でも確認していて、その結果を合わせると、排水施設は東西南北の各方向に設けられていたようである。

石槨の内部は一部盗掘にあっていたが、南側部分を中心に一部の副葬品が残っていて、碧玉製石釧１、碧玉製鍬形石１以上、碧玉製紡錘車６、鉄剣２、鉄大刀１、鉄鉾２、鉄鎌２、鉄刀子１、鉄小札数点、木製刀装具一括、鉄斧３、鉄鉈１、鉄鏃片がみつかった。これらは盗掘のため原位置を保っていたとは言い難いものも多く含まれるが、その出土状況は、石槨南側の壁に近い床の縁に刀剣片があり、粘土床のU字状に窪んだ部分、つまり棺内の東南端で鉄斧が、西隅で鉄片がみつかった。また、石槨の中央から南に偏在して鉄片が多くあり、その東南の壁に近い部分から鉄片に混じって紡錘車をはじめとした主な石製品が出土した。このうち完形の紡錘車４点は、２点ずつ重なって出土した。これが原位置に近い位置からの出土であるとすれば、棺内には鉄斧等の工具類の一部が副葬され、鉄製刀剣類や石製品類などは棺外に副葬されていた可能性がある。

紡錘車のうち四点は完全な形でみつかっており、大きさもほぼ同様で、直径は 4.5〜4.8cm ほど、高さは１cm ほどであり、中央の孔は片側から穿孔したものであった。木製刀装具は、同時にみつかった鉄大刀にともなうもので、把縁の部品とみられ（櫻井 2012）、直線と曲線を組み合わせた特徴的な紋様が彫られている。鉄小札は数点が出土していて、いずれも 3.5×3.3cm ほどの大きさである。その形から小札革綴冑の破片とみられる。

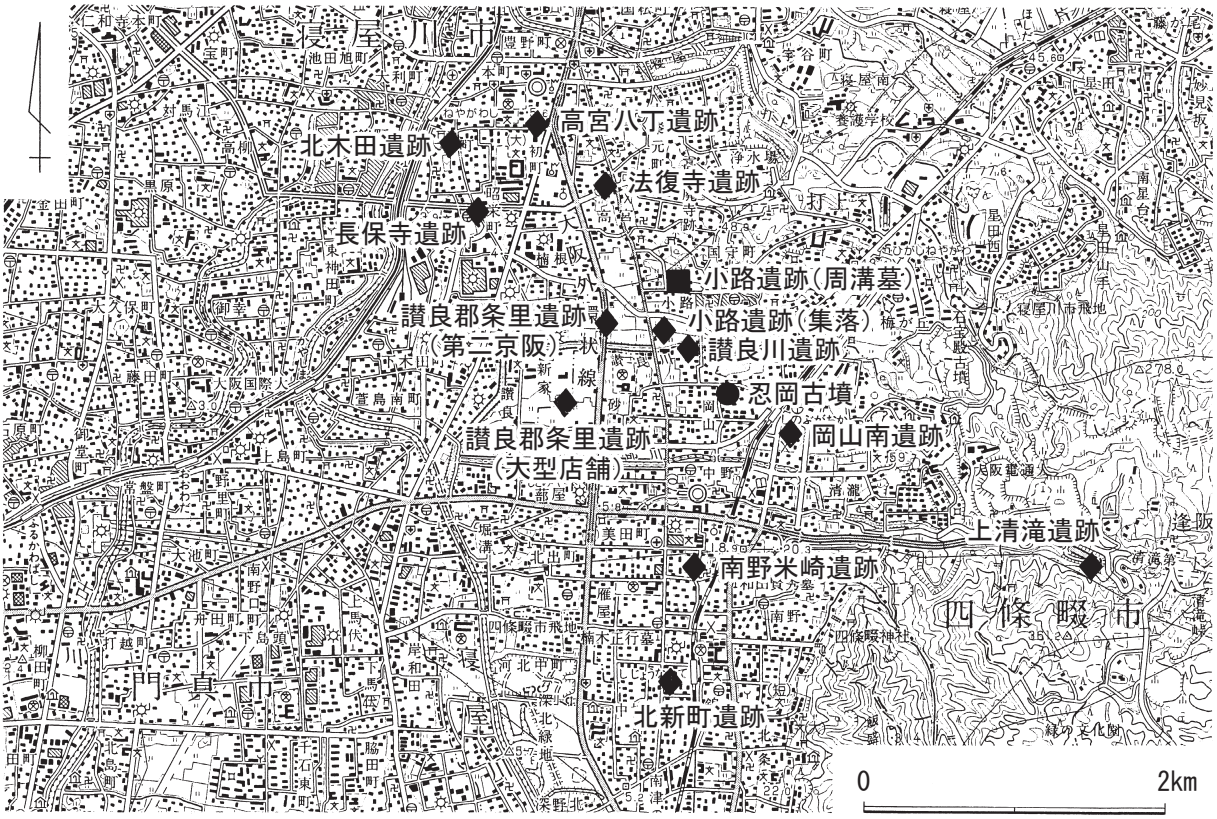
また、これら以外に盗掘により破壊されていた部分から、円筒埴輪片が出土している。これは、古墳の後円部の上に立てられていたものが、盗掘により石槨の部分に落ち込んでしまったものとみられる。また四條畷市教育委員会で行った調査でも円筒埴輪片が出土している（野島 2006）。

忍岡古墳は、盗掘されていたため副葬品のすべてはみつからなかった。おそらく、盗掘されていた石槨の北側に、銅鏡数枚や被葬者が身につけていた玉類などがあったのではないかと考える。銅鏡は数枚であれば被葬者の頭の上に、玉類は被葬者の胸の位置などに副葬されることが多いが、北側は床面の傾斜から頭側の可能性があり、このこともこの位置に鏡や玉があった可能性を示すとみる。

４．副葬品からみた忍岡古墳の位置付け

忍岡古墳は、墳丘の規模や残されていた副葬品の内容から、古墳時代前期中頃の、北河内南部地域における首長墳であると考えられる。

忍岡古墳で出土した遺物をみると、古墳時代前期の中でも先出する要素と、後出する要素とが混在している。小札革綴冑は、古墳時代前期の中でも前半の古墳に副葬されることが多い古いものである（橋本 1996）。腕輪形の石製品（石釧や鍬形石）は、古い型式のものが副葬されている。石釧は蒲原編年のⅠ－a１型式にあたり（蒲原 1987）、鍬形石も最古型式である（北條 1990）。一方で、碧玉製紡錘車は、清喜裕二による第二段階にあたり、やや新しい型式のものが副葬されている（清喜 2013）。



第 19 図　讃良地域の古墳時代前期遺跡

（国土地理院５万分１地形図「大阪東北部」（2008）に加筆）

刀装具の紋様も、この種の紋様の中ではやや新しいものとされる（櫻井 2012）。円筒埴輪は、川西編年Ⅱ期のものが含まれているようである（川西 1978）。こういった要素を考え合わせると、忍岡古墳は古墳時代前期の中でも中ごろの古墳と考えることができるであろう。『前方後円墳集成』編年（近藤編 1992）では２～３期、大賀編年（大賀 2002）では前Ⅳ～Ⅴ期ごろにあたるとみておきたい。

ここで注目したいのは、この古墳から小札革綴冑が出土していることである。この小札革綴冑は、中国系の製品である可能性が高く（高橋 1995）、全国で十数古墳からの出土が確認されていて、奈良県の黒塚古墳や、京都府の椿井大塚山古墳など、三角縁神獣鏡を多量に副葬する有力な古墳でみつかる傾向が強いものである（福永 2009）。この小札革綴冑が出土していることは、忍岡古墳の被葬者が、当時のヤマト王権と密接な結びつきがあり、そのために中国系の製品である冑を下賜された可能性があることを示している。忍岡古墳の被葬者は、ヤマト王権内で一定の地位を得ていた人物だったと考えられる。

副葬されていた遺物には刀剣類や鉄鏃などの豊富な武器類や、腕輪形石製品の中でも男性的な要素を持つ鍬形石が含まれており（小栗 2008）、この古墳に葬られていた人物は男性であった可能性がある。

忍岡古墳は、眼下に河内湖が広がる丘陵先端部に造られている。忍岡古墳の被葬者は、河内湖を使った船による流通を掌握し、ヤマト王権内での地位を得ていた人物だったのであろう。

５．讃良地域古墳時代前期の集落様相

小路遺跡の前方後方形周溝墓に対応するもしくは近接した時期にあたる、庄内式期～布留式初頭の集落は、前方後方形周溝墓の位置からみて南側で最近庄内式期を中心とした集落がみつかっている（寝屋川市教育委員会 2015）。前方後方形周溝墓からみて南西 200mの、讃良郡条里遺跡の第二京阪道路調

査地では庄内式期はじめごろの竪穴建物群が検出されている（井上編 2008）。長保寺遺跡では河川内から庄内式期の土器がまとまって出土している（濱田 1993）。法復寺遺跡と北木田遺跡でも庄内式期の遺構が検出されている（濱田 2004）。このように讃良地域北部ではこの時期の遺物の出土があり、小路遺跡・讃良郡条里遺跡付近には顕著な集落も存在していたが、讃良地域中～南部ではこの時期の遺構、遺物はみつかっておらず、現在のところ讃良地域中～南部でこの時期の集落の存在を想定することはできない。

その後、忍岡古墳に対応するもしくは近接した時期にあたる布留式期の集落は、讃良郡条里遺跡の大型店舗調査地で布留１式期の井戸や土坑と、同時期とみられる掘立柱建物、布留３～４式の土器群等がみつかっていて（後川・實盛・井上編 2015）、第二京阪道路調査地の成果（佐伯・六辻編 2007）と併せ、讃良郡条里遺跡はこの時期の比較的顕著な集落と言える。遺物の出土は北木田遺跡で布留式初めごろの、高宮八丁遺跡で布留式後半のものがみられ（濱田 2004、市村 2009）、讃良川遺跡（濱田 2004）や南野米崎遺跡（1984 年度調査）、上清滝遺跡でも布留式期の遺物が出土している。南部では北新町遺跡で布留式期の集落・水田が検出されている（大東市北新町遺跡調査会編 1991、黒田 1997）。ここに今回岡山南遺跡で検出した大溝と布留２式期を中心とした土器群が加わった。前段階とくらべ中～南部での集落の伸長が著しく、それに比して北部での遺構・遺物の密度は相対的に低下するが、消滅するわけではなく、讃良地域全体に遺構・遺物が分布しているようである。集落域についても讃良郡条里遺跡付近と北新町遺跡付近に比較的規模の大きな集落が検出されている。

６．まとめ

このように、讃良地域の首長墓と、それぞれに対応する可能性のある集落について検討してきた。讃良地域では、庄内式～布留式期初頭ごろ（３世紀中ごろ）に小路遺跡で前方後方形周溝墓が築かれる。この墳墓が築かれる基盤となった集落としては、直接的には小路遺跡や讃良郡条里遺跡一帯に存在した集落があげられ、それら以外にも讃良地域北部に衛星的に集落が存在したものとみられる。小路遺跡の前方後方形周溝墓に葬られた首長の基盤となったのは、このように讃良地域北部を中心としていたのであろう。

その後、古墳時代前期中ごろ（３世紀末～４世紀初頭ごろ）には忍ヶ岡丘陵先端に忍岡古墳が築かれる。やや空白期間が長いが、近接した地域に築かれており、現時点では小路遺跡の前方後方形周溝墓と同一の系譜に属するものとみておく。小路遺跡の首長の次世代もしくは次々世代の首長が忍岡古墳の首長であると考えたい。この古墳の基盤集落としては、現時点では遺構数、遺物量が多い讃良郡条里遺跡の集落が第一にあげられよう。岡山南遺跡は讃良郡条里遺跡よりも古墳に近く、遺物も一定量が出土しているので、集落遺構は未発見だが基盤集落のひとつが存在した可能性は十分にある。これら以外にも遺物出土遺跡が広範にみられ、忍岡古墳の首長の基盤となった地域は少なくとも讃良地域全域にわたっていたものと考えたい。そうした視点でみると、古墳からは 1.7km ほど離れている北新町遺跡も、忍岡古墳の首長の基盤のひとつとなっているとみてよいであろう。

讃良地域の古墳時代前期は、これまで忍岡古墳のみの存在がクローズアップされ、あるいは被葬者は中央から派遣されてきた人物ではないかと考えられがちであった。しかし、近年調査が進んできた結果、首長墓系譜や集落動態を追うことが可能になった。今回の岡山南遺跡での調査成果も、そのような成果の一つであると言える。今後もさらに調査を蓄積し、この地域の古墳時代前期の歴史復元を試みていきたい。

（實盛）

参考文献

後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編 2015『讃良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
阿部幸一 1999『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪府教育委員会。
一瀬和夫 2005「河内平野変遷に関する覚書」『古代学研究』第 169 号、古代学研究会。
市村慎太郎 2009「古墳出現頃の北河内のムラ」『古墳出現前夜の北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
井上智博 2004「讃良郡条里遺跡～小路遺跡で発見された古墳時代遺跡」『邪馬台国と北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
井上智博・多賀晴司編 2003『讃良郡条里遺跡』その２、財団法人大阪府文化財センター。
井上智博編 2008『讃良郡条里遺跡』Ⅵ、財団法人大阪府文化財センター。
岩瀬　透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編 2010『蔀屋北遺跡』Ⅰ、大阪府教育委員会。
岩瀬　透編 2012『蔀屋北遺跡』Ⅱ、大阪府教育委員会。
梅原末治 1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第４、日本古文化研究所。
梅原末治 1985『銅鐸の研究』木耳社。
大賀克彦 2002「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会。
小栗　梓 2008「腕輪形石製品の出土状況と性差」『考古学からみた古代の女性』大阪府立近つ飛鳥博物館。
大阪府教育委員会編 1970『四条畷町、正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
片山長三 1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
片山長三 1967b「縄文時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
蒲原宏之 1987「石釧研究序説」『比較考古学試論』雄山閣。
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号、日本考古学会。
木下保明編 2004『小路遺跡（その３）』（財）大阪府文化財センター。
黒須亜希子編 2004『高宮遺跡（その２）』（財）大阪府文化財センター。
黒田　淳 1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988 年度、大東市教育委員会。
黒田　淳 1997『北新町遺跡第３次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
黒田　淳 2013『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
古代の土器研究会編 1993『都城の土器集成』Ⅱ、古代の土器研究会。
小林謙一 2008『東アジアにおける武器・武具の比較研究』奈良文化財研究所。
近藤章子・山本雅和・多賀晴司編 2006『讃良郡条里遺跡』Ⅳ、財団法人大阪府文化財センター。
近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社。
佐伯博光・六辻彩香編 2007『讃良郡条里遺跡』Ⅴ、財団法人大阪府文化財センター。
櫻井敬夫 1972「考古学」『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2006『こども歴史　わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2010『歴史とみどりのまち　ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
櫻井久之 2012「２つの刀剣装具による文様系統論」『日本考古学』第 33 号、日本考古学協会。
四條畷市教育委員会編 2002『みどりの風と古墳』第 17 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2004『馬と生きる』開館 20 周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市教育委員会編 2008『ひとつぶの籾』第 23 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
四條畷市史編さん委員会編 2016『四條畷市史』第５巻考古編、四條畷市。
清喜裕二 2013「碧玉製紡錘車形石製品の再検討」『技術と交流の考古学』同成社。
瀬川芳則 1992「最古の木製下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ、同刊行会。
大東市北新町遺跡調査会編 1991『北新町遺跡第２次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
高橋　工 1995「東アジアにおける甲冑の系統と日本」『日本考古学』第２号、日本考古学協会。
田中元浩 2009「弥生時代から古墳時代へ変わる土器」『古墳出現前夜の北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店。
千葉　豊編 2010『西日本の縄文土器　後期』真陽社。
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社。
辻本　武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
寺沢　薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会。
中尾智行・山根　航編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。
中村　浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
西尾　宏1987『中野遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
西尾　宏1988『中野遺跡発掘調査概要』Ⅴ、四條畷市教育委員会。
西田敏秀2009「北河内における前・中期首長墓の動向と王権」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
寝屋川市教育委員会2015『小路遺跡現地説明会資料』。
野島　稔1977「四條畷市中野遺跡」『まんだ』第２号、まんだ編集部。
野島　稔1978a『中野遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔1978b「南山下遺跡」『まんだ』第５号、まんだ編集部。
野島　稔 1978c「大阪府四條畷市発見の製塩土器」『古代学研究』第 86 号、古代学研究会。
野島　稔 1979「岡山南遺跡出土の古代下駄」『まんだ』第８号、まんだ編集部。
野島　稔 1980a『清滝古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会。
野島　稔 1980b「四條畷市奈良井遺跡（２）」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔 1980c「四條畷市奈良田遺跡」『まんだ』第９号、まんだ編集部。
野島　稔 1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1982『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1983『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』Ⅱ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1984『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1985「四條畷市南野米崎遺跡」『まんだ』第 24 号、まんだ編集部。
野島　稔 1986a『四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要―1985 年度―』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1986b『中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅳ、四條畷市教育委員会。
野島　稔 1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」『まんだ』第 30 号、まんだ編集部。

野島　稔 1987d「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第 30 号、まんだ編集部。
野島　稔 1987e「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅰ、韓式系土器研究会。
野島　稔 1988「四條畷市“南山下遺跡”」『まんだ』第 35 号、まんだ編集部。
野島　稔 1990「四條畷市・中野遺跡」『まんだ』第 39 号、まんだ編集部。
野島　稔 1991「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』Ⅲ、韓式系土器研究会。
野島　稔 1993a「四條畷市忍ケ丘駅前遺跡」『まんだ』第 49 号、まんだ編集部。
野島　稔 1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」『まんだ』第 50 号、まんだ編集部。
野島　稔 1994a『雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1994b「四條畷市鎌田遺跡（二）」『まんだ』第 51 号、まんだ編集部。
野島　稔 1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」『まんだ』第 53 号、まんだ編集部。
野島　稔 1995『南野遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 1996a「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第 57 号、まんだ編集部。
野島　稔 1996b「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第 58 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997a「五絃の琴」『まんだ』第 60 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一)」『まんだ』第 62 号、まんだ編集部。
野島　稔 1997c『はにわはともだち』第 12 回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
野島　稔 1999「四條畷市大上古墳群」『まんだ』第 66 号、まんだ編集部。
野島　稔編 2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 2006『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔 2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1976『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・藤原忠雄・花田照也1977『正法寺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
野島　稔・前田　暢1984『岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要』Ⅲ、四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2000『奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2001『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始2002『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
野島　稔・村上　始・實盛良彦 2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
橋本達也 1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団。
濱田延充 1993『長保寺遺跡』寝屋川市教育委員会。
濱田延充 2004「弥生時代～古墳時代の寝屋川市」『邪馬台国と北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
濱田延充 2009「古墳出現前夜の枚方・交野地域」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
原田昌則・尾崎良史編 2014『考古資料からみる八尾の歴史』公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
福永伸哉 2008「大阪平野における３世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』史学篇、第 42 号、大阪大学大学院文学研究科。
福永伸哉 2009「古代国家形成期における日韓交流史の考古学的再構築」『アジア歴史研究報告書』2008 年度、JFE21 世紀財団。
北條芳隆 1990「腕輪形石製品の成立」『待兼山論叢』史学篇、第 24 号、大阪大学文学部。
松岡良憲 1987『中野遺跡発掘調査概報』四條畷市教育委員会。
宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
宮野淳一 1992『更良岡山遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
三好　玄・杉本厚典・野島　稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号、財団法人大阪市文化財協会。
六辻彩香編2006『小路遺跡』Ⅲ、(財) 大阪府文化財センター。
村上　始1997a『木間池北方遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始1997b『忍ケ丘駅前遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
村上　始2000『四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001a『正法寺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001b『南山下遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『月刊考古学ジャーナル』No.470、ニュー・サイエンス社。
村上　始2001d「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
村上　始2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
村上　始2001f「四條畷市雁屋遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
村上　始2003a『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2003b「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
村上　始2004『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始2006『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第 14 回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
村上　始・實盛良彦 2013a『中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2013b『北口遺跡・讃良郡条里遺跡発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦 2014『四條畷市文化財調査年報』第１号、四條畷市教育委員会。
村上　始・實盛良彦編 2013『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
森岡秀人ほか編 2003『古墳出現期の土師器と実年代』財団法人大阪府文化財センター。
森岡秀人・西村　歩編 2006『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター。
森下章司 2005「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第 89 巻第１号、日本考古学会。
山口　博編 1972『四條畷市史』第１巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
米田敏幸 2013「古式土師器から見た「河内平野の集落と古墳」」『古墳出現期土器研究』第１号、古墳出現期土器研究会。